

岡垣の歴史と風土③

―岡垣を囲む五つの峠路―

岡垣歴史文化研究会 石井 邦一

岡垣町は、北が響灘の海で、その東西と南はすべて山々に囲まれている。したがって外の地域から岡垣に入るためには、すべて峠越えとなる。

言うまでもなく、峠は山と山の鞍部の通路である。西側の遠賀町との境はすべて山地で、標高20メートルから40メートル前後の第三紀層丘陵で、山田峠は約40メートルである。山田峠は、遠賀町尾崎と岡垣の山田および戸切の接点にあり、ここを東西に岡垣バイパスの国道3号が通り、旧国道は今県道になっている。この山田峠は、交通量が多い峠道で、この道路の宗像市との境が城山峠である。この峠は、かつて宗像氏貞が築いた葛ヶ岳城(城山)の山麓にある。

この峠道は、江戸時代の筑前二十一宿の一つ赤間と芦屋を結ぶ街道である。

明治23(1890)年に開通した九州鉄道は、この峠越えで

敷設されたので、後押し機関車を付けて峠を越えたが、国鉄に移管後の明治42(1909)年に城山トンネルが開通。同時に国道も山沿いから鉄道沿いに移動したため、旧国道の峠は消え、今の峠になった。

さて、城山(369・2メートル)から北側に続く金山(308メートル)・孔大寺山(499メートル)・湯川山(471メートル)が、孔大寺山系である。この山々の鞍部にあるのが次の三つの峠である。まず、城山と金山の間にあるのが石峠である。石峠は、上畑から宗像市平等寺に越える峠道であるが、今では通る人もいない。金山には四つの峠があり、この北の峰には、かつて宗像氏の草場山城址があり、石峠路は葛ヶ岳城の兵糧運搬道だったと言われる。

次に、金山と孔大寺山の鞍部にあるのが地藏峠である。標高約160メートルの峠で、岡垣の高

倉・百合野と山田の地藏で知られる宗像市山田を結んでいることと地藏峠の名がある。

最後に垂見峠であるが、古代からの伝承も残る最も古い峠である。峠の標高は108メートルで、孔大寺山と湯川山の鞍部を通過する峠道は、古代には太宰府と都を結ぶ官道で、内浦には当時の名切の宿駅跡も残っている。

『平家物語』の「太宰府落」の条に、都落ちで幼い安徳天皇を奉じ、千人を超える官人官女が太宰府に向うも、ここもすでに敵勢ありと引き返す場面に、この峠越えの様子を：「たるみ山・鶉濱などいふ

峨々たる嶮難をしのぎ、渺々たる平沙へぞおもむき給ふ。いつならわしの御事なれば、御足よりの血は沙をそめ、紅の袴は色をまし、白袴はすそ紅にぞなりにける。」と書いてある。この「たるみ山」は、

垂見峠の上にある湯川山のことと、「鶉濱」はこのころの内浦郷のことである。

このころの内浦は内海の海に面した村里だったと思われる。平家物語は、鎌倉時代に書かれたもので、この場面は人目を避けての逃避行であり、垂見峠も官道を選けての、道なき道の山歩きだったのだろう。

さて、いつの時代でも峠越えは、単なる人々の行き交いだけでなく、見知らぬ地域の民俗や文化も、これらの峠道を経て伝わったはずである。そんな想いをこの峠道に偲びたい。



▲内浦地区から見た垂見峠